

京都学派と「ファシズム」のレッテル

現代アメリカにおける過度な「政治的な正しさ」の問題*
ポリテイカル・コレクトネス

グラハム・パークス
 (ブレット・デービス 訳)

欧米における日本哲学の研究の発展は、過去数十年來の東洋哲学及び比較哲学の隆盛に比べると、比較的遅れている。そこには、幾つかの原因が考えられる(第二次世界大戦時に日本語・日本文化研究が特定分野に制約されたということもその原因の一部である)のだが、それに加えて、北米の学界における最近の流行は、20世紀の日本の思想、殊にいわゆる京都学派の哲学という、日本哲学の中でも最も接近しやすい分野の研究を危機に晒している。この分野の研究の衰退は、それ以前の日本思想・哲学の研究にも悪影響を及ぼしかねない。上で北米における学問的流行と言ったのは、京都学派に属する思想家をすべて単なるファシストまたは帝国主義者と決めつけ、その故に彼らの思想も哲学的に無意味であると断ずる研究のことである。それは、幾人かの日本研究者及び仏教研究者たちの論文に見られる。このような研究を行っている新・修正マルクス主義は、日本研究の少なくとも一角を制しつつあり、重要な諸問題についての自由な対話を抑圧し、その結果、皮肉にも「左翼によるファシズム」という危険に陥ろうとしている。¹⁾

この論文では、テツオ・ナジタ、H・D・ハルトウニアン、バーナード・フォーレ、柄谷行人、レスリー・ピンカス

による京都学派の思想家批判について考えてみたい。彼らは往々にして、原文引用さえもせずに京都学派について言及する。また、仮に引用することがあつたとしても、ほとんどが歴史的背景や文脈を無視した不十分な引用であり、彼らの見解を立証するための役割をさえ果していない。一般に上記のような批判の背景にある学識レベルは実に低く、現在のグローバルな国際政治の動向における「ファシズム」あるいは「超国家主義」に対する告発の重要な意味合いを考えると、ある場合には無責任でさえある。京都学派の思想家を攻撃しているこれらの学者たちはほとんどが各分野での権威であり、彼らの著作は有名な大学の出版会から出版されているので、彼らに対する反論は急を要する。

とはいえ、彼らに向かつて反論することが、そのまま京都学派の思想家たちによる政治的な著作を肯定することを意味するわけではない。これらの著作の幾つかは、確かに批判されるべきものであり、哲学的文脈と政治的議論との関係についての重要な問題を提起するものである。²しかしここでの私の関心は、それらの問題を議論することにはない。私の関心はただ、早まったイデオロギー的な批判によつてもたらされた誤認を明らかにすることにある。更に、本論文の考察は、日本哲学に関する特定の学派への批判を意図しつつも、アジア研究、より一般的には文化研究における所謂「政治的正しさ」を標榜とする研究一般への批判も視野に入れたものである。

問題の背景

1930年代、国際関係における緊張が高まるにつれ、日本国内では相反する二つの感情が生まれつつあつた。ひとつは西洋帝国主義に対する憤りであり、もうひとつは、当時の状況を考えれば容易に理解できるのだが、自主防衛のみならずアジア全域に及ぶ「新世界秩序」の指導者として西洋列強と対峙することさえも可能な日本の国力への誇りである。太平洋戦争へと進んでいった1930年代後半から1940年代初期にかけて、西田、田辺、和辻、

西谷といった京都学派に属する著名な学者たちは政治哲学に注目し始め、明らかに右翼的・国家主義的なテーマや論調の一連の著作を発表し座談会を行った。これらは当時の軍部と政府から「十分に右翼的ではない」として痛烈に批判されたが、戦後のマルキストたちは、「余りに右翼的である」と同じだけ痛烈に批判した。また西谷は「戦時中、プロパガンダに参加した」という理由で、戦後の数年間、GHQの公職追放令により教職を追われた。

京都学派の哲学者たちの思想は、1980年代の初め頃から関連著作が英語に翻訳され始め、かなり西洋に知られるようになった。³⁾しかし、英米における「哲学」の主流は、一般的に自民族中心主義的な傾向をもち、分析哲学以外の哲学を尊重しなかったため、京都学派の哲学は、哲学科よりもむしろ神学科、または宗教学科で研究された。したがって、京都学派についての初期の研究者たちは、その政治的な側面ではなく、主に宗教的、救済論的側面に関心を抱いた。このように、比較研究に対してよりオープンである宗教学の分野において、現代日本思想に対しての高い関心は維持されてきたのである。専門の哲学者たちが京都学派に注目するようになったのは最近になってのことである。

京都学派の考えが受け入れられてまもなく、米国における日本研究に大きな変化が起こった。知識的流行がめまぐるしく変わっていたこの時期には、様々な学説——新マルクス主義、脱構築、ポストモダン修正主義——が日本学分野に入り込んできた。「他者性」(alterity)、「差延」(difference)とような概念に夢中になっていたそれらの理論家たちは、日本的なものを、差異があるがゆえに興味深い独自性をもつ、とみなす傾向を批判し、そのような傾向は所謂「日本人の独自性」をただ「構築」しているだけだと反論した。そして、日本人論者による「他性の構築」を、「脱構築」の理論を用いて解体することを図った。また、アメリカの新マルクス主義者たちは、日本のマルクス主義者にならない、京都学派の哲学者を批判した。彼らの気に入らなかったのは、当時のアメリカの日本研究者以外の人々の間で高まっていた日本に対する興味である。彼らは、それらの人々の熱狂を日本に対して余りに無批

判的であるとみなしたのである。京都学派の政治的な著作は、その論調が時にはナシヨナリスティックであるとはいえ、哲学と政治及び文化の関係について様々な興味深い内容を含んでいるがゆえに、我々は、その翻訳やそれについての議論を進めなければならない。しかし実際には、議論を進める代りに曖昧な概括で終わらせるものも多く、また時には、当てこすりの非難を投げかけて事は済んだとする傾向さえもある。彼らの論法が矛盾しているのは、フーコーの知識と権力についての理論を用いているにもかかわらず、敢えてその批判的理論を自分自身の論説に向けることをしない、ということである。彼らの日本語についての知識が、彼らの見解に根拠を与えているかのようにも見える。しかし実際には、彼らが見解を出す仕方は、学術的には無責任なものである。彼らの見解は、反論する可能性のある人々はきつと日本語で原典を読むことができないだろうという前提の上に成り立っているのである。

このような悪傾向を導くもうひとつの要素は、「関連しているが故の罪」をとがめることである。なかでもナチスと関係のあったハイデッガーと京都学派の関連が言及されている。何人かの京都学派批判者は、1930年代にハイデッガーがナチ党と関わったということはすなわち彼の哲学全体を無効にすることなので、ハイデッガーが与えた京都学派への影響を指摘するということは、京都学派の著作が政治的に有害なものであることを示すことであると、あたかも明白であることかのように主張する。「ハイデッガー問題」についての論争は激しくなるのみで（擁護者と同じだけ熱心な批判者が互いを無視しながら多量の論文を発表している）、なかなか明が見えてこないが、ハイデッガー問題と彼の影響を受けた京都学派の問題との間には幾つかの興味深い共通点がある。もし問題となつている両方の著作について公平に議論し、それらの共通点を検討すれば、哲学的な理論と政治的な現実の関係について様々な洞察を得ることが出来るであらう。

これから検討する京都学派に対する批判者の学問について、一般的な判断を下すことは出来ない。私の意図は、彼らが京都学派の政治論について行なつた批判を批評することにのみある。この論文では主として西田と並んで批判

の矛先の中心となつてゐる西谷啓治に対する批判を取り扱う。またそれと並んで、九鬼周造に対する批判についても考察したい。九鬼は重要な思想家でありながらも英語文献においてはあまり研究されておらず、しかもそれらの数少ない研究の殆どが、彼の思想そのものについての議論の妨げとなる批判的研究だからである。

京都派閥の「ファシズム」

「ケンブリッジの日本史」の第六巻に、テツオ・ナジタとH・D・ハルトウニアンの共著「西洋に対する日本の反乱—二十世紀における政治的及び文化的批判—」が掲載されている。この著者たちは、西洋に対する日本の文化的特異性を説く日本文化論の展開についての明瞭な解説の中で、日本文化の独自性に対する関心が、結局その独占的な特徴についての主張へと退化してしまう（そしてそれは現代の所謂「日本人論」という流行に繋がっている）、ということを指摘している。彼らはまた、「文化的特殊主義」という節のはじめで、京都学派に属する西田の四人の弟子（西谷も含まれる）を「京都派閥」と名づけ、1941年の座談会「世界史的立場と日本」（後に中央公論に掲載され、その後1943年には単行本として出版された）について論ずる。その座談会についての彼らの解釈を（少し長いものではあるが重要であるので）引用しよう。

「その集団の主とした意図は、当時の日本の立場と、未来に向かつて進むべき道を明らかに示す「世界史の哲学」を展開することであつた。しかしこの「世界史の哲学」をより深く見ると、それが日本の侵略や長期に渡る帝国主義をヘーゲルの形而上学の用語を使い弁論するものであつたことが明らかになる。戦前の日本では、京都派閥ほど常に、また熱心に国家を弁護する集団はなかつた。また彼らほど日本のファシズムに哲学的な輪郭を与えた集団はなかつた。（引用者による強調）「京都の哲学者たちにとつて」歴史は「血」と「土」の交わりである。またこの結論は既に数人のナチスの弁論家から出されたものであつた。（中略）したがって、京都の哲学者

たちは、抽象的な哲学用語を使いながら、日本の帝国主義的な領土拡張を支持するために、それが偉大な歴史の流れの中でより優秀な人間を創造する機会に外ならないということを、恥も臆さずに主張したのであった。」⁴⁾

彼らは、その後の箇所でも、「京都派閥に属する人は、近代文明の諸支配力に対抗しているヨーロッパのファシズムに対し隠さずに敬意を示していた」と述べている。このことを考えると、彼らによる「ファシズム」という言葉の使用が単なる一時的な誇張でなかったことは明白である。彼らはその後も、「京都派閥のファシズム」という表現を使ったり、「京都派閥の数人」は「日本式ファシスト」であると断言したりしている。⁵⁾ しかもそこには、このような激しいレッテルを貼ることについての妥当性の説明はなく、1958年の二次文献から短い引用をした以外は何の説明もされていないのである。

短い叙述でありながらも、彼らによるこの座談会「世界史的立場と日本」についての叙述には幾つかの問題がある。まず、参加者四人の間に考え方の違いがあることを見逃していることである。高坂正顕と高山岩男の二人に比べ西谷啓治と鈴木成高は穏健派であった。⁶⁾ 各人の立場に違いがあったことを考えると、「京都派閥のファシズム」或は「京都学派」一般が、政治的な有害性をもっていったと決めつけるのは有効ではない。西田、田辺、和辻、西谷のような多様な思想家たちをひとまとめにしてレッテルを貼るということは、数多くの興味深い問題を見えなくしてしまう。我々に求められているのは、各々の思想家の著作を公平に解説した上で、その思想家の政治論を評価することである。

また、ナジタとハルトウニアンは、京都派閥が「日本の侵略と長期にわたる帝国主義」を弁論した、と断言し、「京都派閥」を批判している。しかし、より大きな歴史的背景から見ると、その批判は、単に事実の一面しか捉えていないと言わなければならない。私は、1930年代に日本の軍隊が犯した残酷な行動を軽視するつもりはない。しかし、一方で東洋においてイギリス、オランダ及びアメリカが行った帝国主義的な領地拡張を考えると、それに対

する京都学派の思想家たちの反論を、全く不正な反論だと簡単に決めつけることは出来ない。確かにナシヨナリズムはしばしば災難を導くのだが、帝国主義的な領地拡張に対する反抗のひとつの形態としてならば、理解される余地を残した現象でもある——もし1940年代初期における日本の学者たちの考えを、1990年代のアメリカの（政治的な正しさ）の見地から評価してしまうならば、そのように言うこともできないのであろうが。重要なのは当時の日本の侵略、及びそれを支持した京都学派の学者たちを許すことではなく、歴史・政治的な背景の複雑さを吟味し、政府に対する哲学者の支持が全面的なもの、単純なものではなかった、ということを明白にすることである。

更にナジタとハルトウニアンの解釈を不十分なものとしているのは、彼らが座談会に関する幾つかの状況を見逃したことである。⁽⁷⁾ まず指摘する必要があるのは、中央公論も『世界史的立場と日本』も、原文通り正確に掲載されたものではなく、両方とも大部分が編集され、政治勢力の暴威を避けるため「二重にも三重にもベールをかけねばならなかった」ものであったということである。⁽⁸⁾ 第一回目の座談会（1941年11月）の最初のテーマは「いかにして（日米間の）戦争勃発を防ぐか」であったが、真珠湾攻撃の後にそれは「いかにして陸軍を理性的に納得させながら、一日もはやく戦争を有利に終結させることができるか」に換えられた。⁽⁹⁾ 京都学派の思想家たちとある程度交流があった海軍と比べ、陸軍はかなり好戦的でありまた権力もあつたので、座談会の原文に載っていた陸軍や東条英機に対する多くの批判は削除されなければならなかった。「京都学派の思想家たちは戦争を全面的に支持している」というような誤解をまねく印象を残してしまつたのはその結果である。

しかし実際には、戦争を全面的に支持したところではなく、編集された原稿さえも、穏健的すぎる「反戦的な不逞思想」として国家主義者たちによって批判されたのである。1943年に出版した単行本に対する処置として、陸軍は「京都派閥」の公的な行動を抑圧し、その本の再印刷、また他の印刷物（新聞など）において彼らの考えに言及することを禁じた。⁽¹⁰⁾ この事実はナジタとハルトウニアンの「戦前の日本においては、京都派閥ほど常にまた熱心に

国家を弁護する団体はなかった」という主張を疑わしくさせるものである。(この「名誉」を受けるのによりふさわしいのは、所謂「皇道哲学」の熱心な提案者たちであろう。) また、彼らの言う、京都派閥が「日本のファシズムの哲学的な輪郭を描いた」という主張もこれと同じだけ疑わしく、根拠を欠くものである。ファシズムは本質的に「哲学的な輪郭」をもたない、という事実を踏まえると、その主張の根拠のなさは明らかであろう。¹¹⁾

要するに、哲学者の政治的な発言は、その歴史的な背景に当てはめて考えられるべきなのである。ナシヨナリスティックな感情の様々な発露には、歴史的な背景に於て各自異なった意味がある。長期に渡る西洋の帝国主義に対して、当然の理由から恐れを抱いていた国の場合と、例えば、超大国の支配から解放され、最新版の世界秩序の中で自己主張しようとしている現代の幾つかの国の場合とは、そこに生ずるナシヨナリズムの意味もかなり異なるのであろう。勿論、前者のような歴史的な出来事としてのナシヨナリズムの考察は、それと類似した現代におけるナシヨナリズムの問題を明らかにするという目的のために用いられるべきであり、それが最も有効な思考方法ではある。しかし、今まず必要とされているのは、過去のナシヨナリズムを当時の歴史的背景において充分に理解することである。

ナジタとハルトウニアンは見逃したが、座談会のテキストを熟読すれば、堀尾孟が指摘したように、『世界史的立場と日本』は国家主義あるいは帝国主義的な見地からではなく、世界史的な見地から見た国々の中において、日本がたつべき立場を懸命に見つけようとしている記録であることがわかる。座談会では、ゴビノーの「民族の血の純粋性」論(ナチスの人種差別主義の基となった論のひとつである)が取り上げられているが、出席者たちはそれを認めず、代りにレオポルド・ランケの「道義的生命力 (moralische Energie)」を認めている。後者が意味するのは、高山が指摘するように、「血」とは関係せず、「文化的で政治的な国民」といふものに集中している「力」である。¹²⁾

言い換えれば、我々はより広い見地で見ることが必要なのである。つまり、恐ろしい戦争の直前、そして開戦直後

に行われた座談会の、それもかなり編集された原稿のみに基づく見地ではなく、似たような主題でその頃に書かれた、京都学派の思想家たちの諸論文や著作をも含んだ研究見地が必要なのである。¹³⁾

私のナジタとハルトウニアンの論文に対する批判は厳しすぎるのではないか、と思われるかもしれない。しかし、この論文に対して厳しい批判をしなければならないのには正当な理由がある。それは、この論文が文献として特別な位置にあるからである。「ケンブリッジの日本史」のこの章は、これからも長年に渡ってその真偽を問うすべのない人々によって参考とされるだろう。また、この著者たちは高名であるので、彼らが描いた京都学派の像が、イデオロギーの偏見によって歪められているかどうかを敢えて考える、ということが行なわれることはないであろう。だからこそ、私はそれらを批判する必要があると思うのである。

西谷啓治の「若き過ち」

ベルナルド・フォーレの著作『禅が見たものと見落としたもの』における仏教の伝統に対する批判には、確かに興味深い指摘も含まれている。しかしそこには、ナジタとハルトウニアンと同様、京都学派に対する不当な批判の姿勢が見られる。¹⁴⁾フォーレは、「禅・東洋主義」という章の最後の、「戦後の京都学派」について述べている箇所¹⁵⁾で、「西田哲学におけるナシヨナリズムへの傾向は、彼の弟子たちの著作において展開されている」と主張している。更にフォーレは、西谷の発言として次の文章を引用している。(1942年1月に行われた座談会「世界史的立場と日本」からの引用とフォーレは述べているが、実際は1942年3月に行われた座談会「大東亜共栄圏の倫理性と歴史性」からの引用である。)¹⁶⁾

「ドイツ人の方が政治的意識が進んでゐたといふことが言へやしないか。国内体制の整備の必要といふものを、ヒットラーなんかの方が日本の指導的政治家よりもハッキリと自覚してゐたといふ点もあるだらうと思ふ。」

(中略) 今日の東洋の諸民族にはヨーロッパのような国家意識が欠けてゐるが、しかしこれは却つて大東亜共栄圏の建設に機会をあたへてゐるかもしれない。(中略) なぜなら、日本の立場を中心に共栄圏の民族として形成されつつあるからである。」

フォーレはこの箇所について次のように述べている。「私が知っている限り西谷は、このような若き過ちに対して一度も後悔の念を表わしていない、また彼の思想の一部分であるこの点に対し彼の弟子たちは、未だそれを議論の対象としたことがない。」しかしここで述べられている「若き過ち」とは一体何であつたのかは決して明白ではない。というのも1942年1月に西谷は既に41歳であり、その頃日本はドイツ側につき参戦したばかりであつた。同盟国の指導者の方が日本の指導者たちよりはつきりと「国内体制の整備の必要」性を自覚していた、と述べたことは、果たして「後悔の念を表わすべき」程の「過ち」であつたのだろうか。

それ以外の「若き過ち」とは何であつたのかを理解することは更に難しい。そもそも、引用文の最初の中略以降は、フォーレが脚注で示したページには載っていないのである。¹⁷ 調べたところこれらの文は直接の引用文ではなく、数ページ後にみられる西谷の発言についての作者の自由な意識なのである。しかしここで意識された発言は、その前後の文脈に戻らなければ本当の意味を理解することが出来ない。西洋の帝国主義がもたらした害を考察しながら、西谷はマレーシア、インドネシア、フィリピンにおけるイギリス、オランダ、アメリカの植民地政策の実施法について次のように説明した。それらの国々は、比較的快適な生活を保証しながらも、実際には搾取するという作戦(「阿片政策」と西谷は呼んだ)を行つていた。そして、日本は東アジアにおいて同じような役割を持たないように気をつけるべきである、と西谷は強調した。¹⁸ これは決して公の場で懺悔しなければならないような考えではないだろう。西谷の発言が「国家主義的なイデオロギーに盗用されること」はありえたかもしれない。しかし、当時権力をもっていた最右翼者たちは西谷の考えを非難していた、という事実があるので、そうならなかつたのは明らかである。

西谷の態度は傲慢であり、見下すような態度であったかもしれないが、決してファシズム的ではなかった。また西谷の発言におけるナショナリスティックな語調も、西谷が他の東アジアの国々が自国の国家意識を（但し日本の指導の下で）築きあげることが奨励している、と考えて聞くと、幾分和らぐのではないだろうか。

西谷の使った「高い水準」という言葉の意味が少々曖昧であったことは認めなければならない。確かに、新マルクス主義の過激な平等主義の立場からみれば、他の東アジアの国々より日本は上である、という主張は「過ち」だと思われるかもしれない。しかし私は、ある文化が他の文化より高レベルに達しているということは、事実としてありうることなのではないかと思う。したがって私には、この西谷の主張は明白な過ちではないように思われる。むしろ、あらゆる優等と劣等の判断自体がそもそも疑わしい、という独善的な（政治的な正しさ）の考え方こそ、アジア研究の幾つかの分野で研究の妨げとなっているのである。日本人論の馬鹿げた、また行き過ぎた主張を否定しなければならぬのは勿論であるが、それと同時に、中国という明らかな例外を除き、日本が他の東アジアの国々よりもある面で豊かな文化・歴史をもっているという考え方も、一つの考え方として認められる余地はあるのではないだろうか。

フォーレは、現代の京都学派の哲学者たちの思想に対する「イデオロギー的な批判」を要求し、「ハイデッガーの場合と同様に、京都学派の場合も、その『哲学的なテキスト』がイデオロギー的あるいは政治的な『背景』にどれだけ影響されていたかを問わなければならない」と述べている。¹⁹確かに、哲学的なテキストはその政治的背景の上に据えて考察すべきである、という彼の主張に賛成することは出来る。（彼の言う「イデオロギー的な批判」というのが、イデオロギーに対する批判のことであるのか、それとも彼らが行なっているその批判自体がイデオロギー的であるということなのかは私には分らないのだが。）しかし、もしフォーレが、修正を受けている西谷のヒットラーについての発言を「哲学的なテキスト」としてみなしたいのなら、それと同時に、同じ時期に西谷がヒットラーについて論じた他の文章も考慮しなければならないだろう。そのような文章とは、1940年に出版された『宗教と文

化」の中の最後の論文の短い節「ヒットラー運動の精神」である。²⁰ ヒットラーについての西谷の考えを批判するならば、少なくともこの論文をとりあげることが必要である。この論文で西谷は、ヒットラー運動の理念を、そのうちの幾つかのみに限っては承認している。しかし西谷は、ヒットラーの唯物論、国家主義、人種差別主義に対しては厳しい批判を行なっている。この論文で気になる箇所は、唯、西谷がニーチェ的な考えを一旦離れ、ヒットラーが「利己主義や我欲」を非難し、同胞または国家のために自己を犠牲にする覚悟について奨励したことを、肯定的に解説した部分くらいである。²¹

フォールの西谷に対する批判は、単なるその時だけの論争術だったと思われるかもしれない。しかしその後彼は、日本研究の論文集に寄稿した論文において、前述の自論文を展開し、京都学派一般を批判する。²² 以前の論文で「戦後の京都学派」と記された節は、今度の論文では「西谷啓治と戦後の京都学派」と題された。²³ 今度の論文でなされた、中央公論の座談会における西谷の発言に対する批判には、その背景についての考察がわずかに含まれている。しかし、フォールの、「これらの座談会は、人の生活の全ての次元を統一する意味での全体戦を奨励したものであった」という主張は誤解を導くものである。²⁴ その後フォールの論文は次のように続いている。

「確かに、西谷のような日本の知識人は、戦争犯罪を犯した訳ではないし、日本の天皇の名のもとに犯されていた犯罪についても殆ど知らなかったかもしれない。(中略)しかしまさにこのような「政治論における」抽象化の傾向は(中略)ファシズムへの道を、積極的に支持あるいは正当化するとは言えなくても、それへの道を開いているのである。」

ここでフォールは、ナジタ・ハルトウニアン²⁵の批判(フォールの批判より直接的ではあるが、同じく論証されていない)と同じように、西谷の思想とファシズムとを繋げている。しかしフォールもまた、その繋がりを立証するテキストを示すことはしていない。続いてフォールは、フィリップ・ラクーラバルト(特に、戦後ハイデッガーがナチ党

を支持したことにについて沈黙したことへの批判)に言及し、次のような結論を出す。

「最も納得のいかないことは」、西谷がハイデッガーやエリアーデやド・マンと同じように、偉大な思想家(彼の場合はさらに宗教的な覚者)として後の世代に受け継がれながらも、自分の過去についての沈黙を保ったことである。²⁵⁾

ここでもいまだに、公に反省すべきであった犯罪とは結局何であったのかは述べられていない。のみならず、この〈関連してるが故の有罪〉に基づく非難は、誤謬を含んだ類推によって行われている。したがって彼の議論は、結局、無意味である。少なくともハイデッガーの場合は、名の知れた人物として(個人的には支持していなかったとしても)ナチ党の黨員となったのであるから、人種差別主義とユダヤ人排斥運動を支持していた、と言えるかもしれない。しかし、全く過ちを犯していないとはいえないにしても、西谷は帝国主義者あるいは超国家主義者たちを公的に支持することは拒んでいた。また国際的な秩序の中で日本がなすべき役割を、「世界的」な見地から考えることを奨めるために、ヨーロッパのファシズムにおける人種差別主義を批判していた。

続いてフォーレは西谷の1949年の著作『ニヒリズム』について論ずる。フォーレによるとこの著作において「西谷は、戦争の責任は西洋的なニヒリズムと、それが日本の帝国主義者に与えた影響にあると主張した。彼はまた日本の伝統に還ることを奨めるが、その伝統のイデオロギーが戦争に導いた原因のひとつであったことに最後まで気が付かなかつた」。²⁶⁾この叙述だけを見ると、西谷の思想が非常に単純なものであったかのように聞こえる。そのために、西谷の著書を開くかもしれないなかった潜在的な読者が、この叙述によってその機会を奪われることになる可能性がある。しかしフォーレの叙述には、明らかな事実誤認がある。『ニヒリズム』では「戦争」についての記述は全くないのである。したがって「西洋的なニヒリズム」が戦争をおこした、というような主張は勿論見られない。また西谷は、単純な意味での「日本の伝統へ還ること」を勧めているのではなく、(ここでもニーチェの影響を受け)

伝統の中の幾つかの要素を再度自分のものとすることを、奨励している。西谷は次にように言う。「過去を未来へ、未来を過去へ媒介する創造、さきに言つたやうな意味に於いて世代の系列のうちでの思考を回復し、祖先への責任を果すといふこと、伝統された精神的高貴を担ふといふことである（勿論それは、さきにも言つたやうに旧態の復活といふ意味ではない。旧態は過去であり死せるものである）」²⁷

フォーレは批判をより拡げ、次のように主張する。「『西谷の、戦後の非政治的であるが故にいわゆる（無害）である宗教哲学は、彼の戦時中の著作と関連している』ということの可能性を認めることは、重要である。」ここでフォーレが引用している文は、不可解にもニーチェと東洋思想についての論文集に対するたった一ページの書評からとつたものである。²⁸ 彼がなぜ京都学派に関する議論にあまり関係していないようにみえる人の意見を引用しているのか、疑問に思われることであろう。このウィリアム・ハーバーが書いた書評からの引用文を少し遡つて見てみたいと思う。

「ここで一番納得のいかないことは、（ニヒリズム）と見なされているものを（克服）しようとしていることである。西谷の、戦後の非政治的であるが故にいわゆる（無害）な宗教哲学は、彼の戦時中の著作と関連しているので、哲学的な意味での『世界新秩序』の提唱者として、全く無批判的に西谷を称賛（神聖視とまでは言わないが）することは非常に問題のあることである。」

この編集本の寄稿者の数名が西谷の著作を引用したことや、編集者であった私自身が彼を「比較哲学の分野における重要な先駆者」²⁹と呼んだことは、ハーバーによると、いわゆる「西谷を称賛・神聖視」したことになるらしい。しかし、もしそうだとすれば、天国や万神殿には数え切れない程の神々が存在していることであろう！

「西谷の、戦後の非政治的であるが故にいわゆる（無害）である宗教哲学は、彼の戦時中の著作と関連している」という遠回しな批判は、（事情に精通した読者たちなら）、この「関連」は有害なものであり、また西谷の戦時中の

著作は彼のその後の思想をすべて無効にする程致命的なものであった、ということ（当然知っているはず）であることを暗示している。しかし、西谷の戦時中の著作の与える影響が、それ程の問題だと思っているのであれば、ハーバーは、なぜそれがどれだけひどいものであるかを説明していかないのであろうか。最も悪影響を与えた（と思っっている）著作を翻訳すれば、欧米の読者に対して、著作自らがその不正について述べる事が出来るであろうに。フォーレが、学問的議論を行っているかのように見せかけている論文の中で、西谷の思想を批判するためのひとつの例証としてハーバーの遠回しな批判を迷わずに引用したことは、京都学派に対する批判の質のレベルを示すものである。

フォーレの反感がもうひとつの対象、いわゆる「新京都学派」にも向けられていたということは、彼の論文の続きの節で明らかになる。確かに新京都学派は、排外的な日本人論の一つの源となつていられるかもしれない。フォーレが「もとの京都学派」を過激に批判する原因は、（独自にして壮大である日本文化）の現代の代弁者（新京都学派）に対する憤慨にあるのではないだろうか。³⁰ もしそうなのであれば、もとの京都学派と区別して彼ら新京都学派—京都学派に照らし合わせることで自分たちの立場を確認しながらも、自分たちを京都学派から区別している亜流—の思想こそを批判すべきなのである。

九鬼周造と日本の帝国主義

英米の学界において、九鬼の哲学は残念ながらもあまり論じられていない。また、残念なことに、英訳された柄谷行人の論文における否定的な解釈が、今日の九鬼についての議論の論調を左右している。柄谷は、対話の形式で進められたハイデガーの論文「言葉についての対話より—ある日本人とある質問者との間の—」における「いき」についての論述を手がかりに、九鬼の「いき」の構造』を紹介した。「結局のところハイデガーには（いき）がわか

っていない³¹」と柄谷が述べたのは、まさにその通りである。しかし、それに続いて柄谷は、九鬼は「反西欧的日本中心主義や（日本精神）を称揚する人々とは違っていた」にも拘わらず、「戦前のファシズム擡頭期には、ためらうことなく〈近代の超克〉の潮流に身を投じた」と述べた。³² この九鬼とファシズムにおける関連性についての遠回しな主張は、上滑りなものである。確かに〈近代の超克〉の運動の参加者の中にはファシストがいたかもしれない。しかし、もし九鬼とファシズムとを関連づけるのならば、それには根拠と論証が必要である。近代の幾つかの様相は不健全であり、それらに対して反抗すべきであると主張する一方で、ファシストと関わらずにいることは可能であるのだから。

次に柄谷は、九鬼の初期における「いき」の特徴についての分析と、後期に類比したその特徴と「現御神の三種の神器」との連続性は、九鬼が「十九世紀的な帝国主義のイデオログに転身してしまった」³³ことを示す、と主張する。しかし柄谷がこの主張を根拠づけるために引用した文は、全く無害であり、彼の主張を立証するような性質の文ではない。（もし「剣は平天下を意味する」という表現自体が有害であるという前提の上に立つのならば、立証されたことになるのかもしれないが。³⁴）九鬼は論文においてその類比を冷静に論じ、その象徴性を、狂信的愛国主義的な感情を混えることなしに説明した。

九鬼が行った類比を、そのもの論文全体に戻してみれば、柄谷の主張の偏向は一層明らかになる。九鬼のこの論文は少しも帝国主義的ではない。象徴についての議論の後の節において、九鬼は、世界における根本的に非帝国主義的な日本の立場という将来の像を描いた。確かに彼は「日本主義」を語っているが、しかしこれも「世界主義」あるいは「国際主義」の立場から述べられたものであり、日本の特質と文化は他に相対することによってのみ構築され、他国とかかわることによってのみ自らの可能性を発揮することができる、と主張したのである。³⁵ 西田と西谷の国際主義的な考え方と同様に、この論文上での九鬼の立場は、現代世界における〈多文化主義〉にあたるような、非独

断的であり文化的にオーブンな立場である。九鬼は日本を含む各国の文化は独自性をもつ、という明白な事実を否定せず、それは世界の文化が向上するための前提である、と理解していた。³⁵ つまり彼は決して「十九世紀の帝国主義のイデオログ」と同じではなかったのである。

それにもかかわらず、そのようなレッテルを九鬼に貼った柄谷は、次のように論文を続ける。

「ハイデガーについても同じことが言える。同じ頃にハイデガーは次のように表明した。『精神とは空転する聡明さでも、才人の無責任な遊戯でもなく、知的な解剖術を果てしなく繰り広げることでもなく、ましてや普遍的理性なんぞではない。精神とは、存在の本質への根源的に気分づけられた知的決意性である』。このテキストをあげた後にハイデガーは、西欧の中心にあるドイツ民族の歴史的使命について語っている（『形而上学入門』）。こうした文脈において、九鬼の『いき』とハイデガーの精神は呼応し合っている。そしてそれぞれ、

『大東亜共栄圏』、『第三帝国』に行きついたのである。³⁷

この柄谷の文を理解することは難しい。それは一つには、ハイデガーのテキストからの引用文を誤訳している³⁸からであるが、なによりも、ハイデガーにおける「精神」と「ドイツ民族の歴史的な使命」との関係についても、また、ハイデガーの「精神」と九鬼の「いき」とが共鳴するという根拠についても、十分に説明されていないからである。また、九鬼及びハイデガーの主張が「大東亜共栄圏」と「第三帝国」に至ったという主張には、慎重で緻密な論証が必要とされるはずなのだが、あきれたことに柄谷は、何の論証も行わず、デカルトへと論題を移した。³⁹

柄谷の九鬼に対する偏見は、英語で書かれた九鬼についての初めての本格的な研究書『日本帝国における文化の正当化—九鬼周造と国家的な美学の上昇—』⁴⁰を出版したレズリー・ピンカスの解釈姿勢に悪影響を与えた。この著作においては、九鬼とその研究背景について様々な興味深い指摘がなされているが、ハルトウニアンの生徒でもあったピンカスは、師ハルトウニアンと柄谷との解釈姿勢を引き継ぎ、九鬼の政治論を厳しく批判した。（ピンカスは、

柄谷が「九鬼とハイデッガーに関連している研究課題と両者の国家におけるファシズム的發展との間に、イデオロギー的な直線を引いたのである」（94頁）、と主張した。ピнкаスの研究における解釈上の偏見は、その著作の表紙に記されている次の文にもみられる。「フーコー、マルクス文化主義者たち、またフランクフルト学派思想家たちの影響を受けピнкаスは、伝統的な解釈に反して、日本における美学的近代主義と政治的ファシズムの驚くべき親近性を暴露した。」そしてその著作はこの文の通りに展開されているのである。提示された二次文献の殆どが（英語も日本語のものも含め）マルクス主義流であることが示しているように、彼女の九鬼研究の方法は明らかに偏狭である。「1844年の手稿」時代のマルクスなら、おそらく九鬼の文化論の多くを高く評価したことだろうが、新マルクス主義者たちの文化的教養に対する敵意は、九鬼の哲学に含まれる評価されるべきところを見えなくしているのである。

ピнкаスは坂部恵の次の主張を批判した。「西田幾多郎や和辻哲朗等、多かれ少なかれ日本の伝統的共同体の線に連なる集団意識を共有して、それをみずからの思想的営為の基盤とすることのできた思想家達とは、はっきりと別な場所をその存立の基礎としていた」⁽⁴⁾。坂部の、九鬼の生い立ちについての心理学的な論述を批判しながら、ピнкаスは次のように述べる。

「坂部は、戦後の日本の思想家たちの多くが歴史的な屈辱としてみなしたこと（1930年代から1940年代にわたる抑圧と軍国主義を支えた家族国家イデオロギーに、戦争の知識人たちが共謀したこと）から知識人としての九鬼を救い出すために、彼の子供時代、つまり彼の家族の屈辱をその九鬼論に取り入れた。（中略）『「いき」の構造』が巻き込まれている歴史的な情勢と文献における網状組織を暗黙のうちに無視することにより、坂部は九鬼の思想を政治的に弁護しているのである。」

この引用文を読むと、ピнкаスが坂部の主張を大きく誤解していることがわかる。また、坂部が九鬼の執筆時の

背景を誤解していたという主張についても立証せずにすましている。坂部は九鬼の哲学を深く洞察している。また坂部の著作は、ピンカスの文献録にのせられた、九鬼についての唯一の（個人の）研究書である。それにもかかわらず、上記の引用文以降に、ピンカスは坂部のこの優れた著作について議論し続けない。私にはそれが不思議で仕方がない。恐らくそれは、九鬼を非常に非政治的な思想家とした坂部の解釈が、九鬼を日本ファシズムの共謀者とするピンカス自身の解釈と正反対であるからではないだろうか。

ピンカスの著書は、全250ページの著書なのであるが、索引によれば、そのうちの25ページもが、「九鬼とファシズムとの密接な関係」という問題に触れている。また、5ページが、「『いき』の構造」とファシズム」という問題に触れているが、そこにおいても、他の場所においても、この不健全な関連は論証されていない。ピンカス自身、次の引用文に見られるように、九鬼の名著は政治的な批判の対象として扱いにくいと認めざるを得なかった。「『いき』の構造」では国家あるいは国について記されている箇所は非常に少なかったのだが、この本において前提とされている文化的共同体とは、実際、国家主義を主張するのに好んで用いられた表現であった、とも言えるであろう。（181頁）また坂部の示唆を念頭においているのだろうが、九鬼の著書には「家族国家のイデオロギー」あるいは「国」さえも全く表わされていない、ということもピンカスは認めている。それにもかかわらず、ピンカスは次のような結論を出した。「『いき』の構造」における「国」についての発言は、テキストの表面上では目立って欠如しているのだが、実際には形を変えて発言されているのである。（235―236頁）しかし、その「目立った欠如」から導かれるより自然な結論とは、その著作は政治的に重要な意義をもっていなかった、ということではないだろうか。

九鬼の著作は、それだけでは彼がファシズムへ傾向していることの証拠を提供しない。そこで、ピンカスは柄谷に従い、（ハイデッガーの政治的な不正当性はまるで立証しなくても良いかのように、それは取り上げず）ハイデッ

ガーとの関係に言及することによって（関連しているが故の有罪）を立証しようとする。しかしピンカスは、その主張を立証するために不可欠なハイデッガー哲学の理解に力を注ぐ代りに、ピーター・デールによる単純であり誤解をも含んでいたハイデッガーの「言葉についての対話より―ある日本人とある質問者との間の」についての解釈⁴³に言及することで満足する。ピンカスによるハイデッガーの哲学的な「ナチ党のドイツとの関連」についての論証は、結局『存在と時間』において「民族」という言葉が記された唯一の箇所についてのひねくれた勝手な解釈のみをよりどころとしている。⁴³

長いエピローグにおいてピンカスは、「『いき』の構造』において展開されている理論的な構造が、後の論文における、より闘争的な諸主張の堅固な基盤となった」こと、また1930年代後半の「イデオロギー性がより明白な著作」において九鬼と「ファシズムの文化的論述との密接な関係は明らかに目立っていた」ことを示そうとした。⁴⁴ 私はこの主張を別の論文において批判したことがあるので、ここではその批判の主旨のみを述べることにする。確かに社会的また政治的な緊張が高まり、太平洋戦争が勃発しようとしていた時期に、九鬼は論文において国家主義的または文化主義的帝国主義的な論調をもった幾つかの発言をした。しかしながらピンカスは、これらの発言をその文脈から引き離し、また多くの対照的な発言を無視することによって、それらをより悪意あるもののように思わせたのである。

例えば、「日本的性格」という論文において九鬼は偏見のない国際主義を奨励し、同胞に向かって「自国以外の他の諸国の文化の特色や長所をそれぞれ認め、その正当の権利を尊重して人類共存」することを唱え、そうすれば「各国の文化の特殊性を発揮することによって世界全体の文化が進歩して行く」ということを主張した。⁴⁵ しかしピンカスは、この主張と、九鬼が主に意図していた「日本主義」と「世界主義」との統合という主張との二つの主張を、「国際主義への修辭的な見せかけ」（223）として片付けた。一思想家の主題をこのようにいとも簡単にあし

らうピンカスのやり方は、息を飲むほどひねくれたやり方である。同様に、ピンカスは都合の良いものだけを引用することによって、「時局の感想」という4ページの小冊子の著者であった九鬼を残忍な主戦論者として描写する。しかし彼女は、中国の文化が退廃しているように思えることに対して九鬼が悲嘆していた（戦前の教育を受けた九鬼は中国の文化を深く尊敬していた）ことについては、全く無視したのである。⁴⁶

おわりに

この論文では最近の日本研究または仏教学研究界に寄与した論文に見られる、幾人かの京都学派の学者の政治的不正当性を、論証することなしに（あるいは論証不十分なままで）批判する一連の非難について述べてきた。これに関わる数人の著者が、各分野での権威であり、有名大学の教授、または有名な大学出版会から著書を出しているような人物でなかったのであれば、この一連の徴候についてこれ程議論する必要はなかったかもしれない。しかし、彼らは日本哲学を勉強する学生（もしくはこれから勉強しようとする学生）に対してかなりの影響力を持つので、学生たちからある特定の思想家たちを勉強しようとする気持ちを奪ってしまう可能性がある。また彼らは修辞によって、重要な問題についての議論を未熟なままで彼ら自身にそのような意識はないにしても終わらせてしまいがちである。

もう一度強調するが、私は、京都学派の学者の発言の幾つかがかなり問題性である、という主張を否定しようとしているのではない。日本人論に関わる多くの論は、率直に言えば愚かなものであり、害をもたらす可能性のあるものである。また驚くべきことに今日の日本の政治家たちは、近代日本史の幾つかの出来事に関して自分が都合良く忘れるだけでなく、より危険なことにそれを国民の記憶から消そうとしているのである。⁴⁷ それらは、確かにこのように厳しく批判されるべきものもあるのだが、それぞれの内容は慎重に検討されるべきである。無論、「ファシスト」「帝国主義者」あるいは「極右翼者」というレッテルを貼るのに値するものに対しては、最大の力でもって抵

抗すべきである。しかしそれだからこそ、無差別的にそれらのレッテルを貼ることは極めて無責任なことである。

頻繁に行われている京都学派に対する無責任な批判は、更に残念なことに、国家主義、新ファシズム、人種差別主義、また国際文化理解といったテーマに関わる現代の諸問題に密接に関連した幾つかの興味深い論点を、不明瞭にしてしまっている。これらの論争点は、今日の学者たちに責任をもって対応すること―しばしば見られるイデオロギ―的な偏見をもった自己満足的な扱い方とは随分違うもの―を要求しなければならぬ程差し迫ったものである。日本研究における（政治的な正しさ）の流行が啓発的になる可能性をもつ対話を、それが本格的になる前に終わらせてしまわないことを我々は祈るのみである。

注

この論文は *Philosophy East and West* 47/3 (1997): 305-36 に掲載された論文 "The Putative Fascism of the Kyoto School and the Political Correctness of the Modern Academy." を書き直したものである。これを研究するにあたり、日本政府からの基金によって運営されているハーバード大学の *Japan Studies Endowment* から援助を頂き、深く感謝している。

* 翻訳者注: 表題において「政治的な正しさ」と訳した言葉の原語は *political correctness* である。この言葉は米国において（学界そして社会一般においての）近年盛んな、人々の言語や習慣に含まれている人種的、性別的、または文化的な偏見をなくそうとする運動を意味する。この運動は重要な利点のみでなく、たとえば、極端な主張が行われたときに独善に陥るというような欠点をもっている。著者は日本人の読者に対して、この運動の両面性の認識を期待している。（すでにこの言葉に聞きなれている米国人読者に対しては、特別な説明をせずにこの言葉を用いている。）著者は、この運動が学界にもたらす危険性（他人の偏見をなくすためにこの運動をしているにもかかわらず、皮肉にも極端に偏狭な考え方に陥りがちであること）を明らかにしようとしているのである。

- (1) ポスト構造主義、脱構築、またはポストモダニズムの最初の主唱者（殆どがフランス人であったが）と、米国における非哲学的な彼らの信奉者あるいは模倣者とを区別をしたいと思う。西洋の哲学的あるいは知識的伝統の深い理解の上に出立している前者の中には、意義あるものが多い。
- (2) この問題のうちの幾つかは、何人かの寄稿者によってようやく英語で議論された。James W. Heisig and John Maraldo, eds., *Rude Awakenings: Zen, the Kyoto School, and the Question of Nationalism* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1995). この論文集はアメリカ及び日本の学者たちが寄稿した十五の論文から成り、幾つかの問題について様々な見地から議論されている。それらの論文の中で、イデオロギー的な主張を含んでいるものは、*よくわすかである*。
- (3) これに関しては、J. W. ハイジック監修のもとで *Nanzan Studies in Religion and Culture* シリーズとして出版されている。優れた翻訳書や注釈書が大きく貢献している。
- (4) Tetsuo Najita and H. D. Harootian, "Japanese Revolt against the West: Political and Cultural Criticism in the Twentieth Century," in Peter Duus, ed., *The Cambridge History of Japan* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), volume 6, pp. 771-74, 741-42.
- (5) Najita and Harootian, "Japanese Revolt," pp. 742-43. 確かにヨーロッパのファシストと同様に多くの京都学派の学者たちは、近代の支配力に対して疑惑をもっていたのだが、その事実だけでは彼らがヨーロッパ的ファシズムに敬意を払っていた、という主張を立証することは出来な。
- (6) この座談会についての西谷の発言に対して公正な批判をしつづける John Maraldo, "Questioning Nationalism Now and Then," in *Rude Awakenings*, pp. 333-62, 352-55 を参照。
- (7) 座談会の原本と日本語の二次文献を踏まえた上で、それらの状況とその意義を詳しく述べた英語の論文としては、次の論文がある。
- (8) Horio Tsutomu, "The Chuokoron Discussions, Their Background and Meaning," in *Rude Awakenings*, pp. 289-315.
- (9) Horio, "The Chuokoron Discussions," pp. 301-02.
- (10) Horio, "The Chuokoron Discussions," pp. 291, 303.

- (11) George H. Sabine, *A History of Political Theory*, 4th ed. (Hinsdale: Dryden Press, 1973), pp. 799-849. © "Fascism and Nationalism" という章における最初の議論を参照。
- (12) 高坂正顕他『世界史的立場と日本』（東京、中央公論社、1943年）107頁。Horio, "The Chukoron Discussions," p. 306からの引用。
- (13) 日本語の論文も背景として他の著作を考慮しておらず、哲学的な考えよりもイデオロギー的な事柄に注目しがちである。また、英語の論文における批判の状況についても、同じような問題がある。この問題に関しては、Horio, "The Chukoron Discussions," p. 291または Rude Awakenings, pp. 351-56 における John Maraldo の論文と論じられている。
- (14) Bernard Faure, *Chan Insights and Oversights* (Princeton: Princeton University Press, 1993).
- (15) Faure, *Chan Insights and Oversights*, p. 85.
- (16) 「世界史的立場と日本」とは最初の座談会（1941年11月）につけられた表題であり、三つの座談会をまとめ、後に出版した本の題名でもあった。
- (17) フォーレは "Kosaka, et al. 1942, 201" を引用していることを示しているが、実際は1943年の出版本の201頁のことを言っているであろう。しかしその後も、彼の引用文の中の最初の二つの文のみが見られるだけである。「したがって、最初の「中略以降の文は翻訳者が英語から訳したものである」。
- (18) 高坂他『世界史的立場と日本』204-5頁。
- (19) Faure, *Chan Insights and Oversights*, p. 87.
- (20) 西谷啓治『宗教と文化』（東京、国際日本研究所、1969年）における「近世ヨーロッパ文明と日本」149-90頁。
- (21) 西谷「近世ヨーロッパ文明と日本」184頁。ヒットラーは、国家を形成しそれを維持する力は、「全体性に対する個人の犠牲能力と犠牲意思である」と主張した (Mein Kampf, p. 167)。ヒットラーがこのような理想主義（ある理想のために自分の人生を犠牲にする覚悟をもつこと）を奨励したことについて議論した時、西谷はヒットラーの著書の次の箇所に言及した。「我々はそれ（真の理想主義）をただ全体性に対するまた同胞に対する個人の犠牲能力とのみ解する」 (Mein Kampf, p. 327)。
- (22) Bernard Faure, "The Kyoto School and Reverse Orientalism," Charles Wei-Hsun Fu and Steven Heine, eds., *Japan in Traditional and*

- Postmodern Perspectives (Albany: SUNY Press, 1995), pp. 245-81.
- (23) Faure, "The Kyoto School," p. 256.
- (24) Faure, "The Kyoto School," p. 257. 「全体戦」という言葉は第三回座談会まで使われなかった。また第三回座談会でも主な議題は「全体戦」ではなく参加者が選んで使った言葉「総力戦」についてであった。堀尾はこの二つの言葉を次のように区別する。「ヨーロッパでの戦争も含めて今回の世界戦争が、単に武力を中心にした全体戦 (Total Krieg) に対して「国家イデオロギーないし世界観をも含んだ」むしろそれが中心の『総力戦 (Generalmobilisierungskrieg)』なのだよ」 ("The Chukoron Discussions," p. 311.)
- (25) Faure, "The Kyoto School," p. 262 (Philippe Lacoue-Labarthe, Heidegger, Art and Politics (Oxford: Blackwell, 1990), p. 21 以下文)
- (26) Faure, "The Kyoto School," p. 261.
- (27) 『西谷啓治著作集』第八巻 (創文社、1986年)、183-4頁。
- (28) William Haver, Review of Nietzsche and Asian Thought, Journal of Asian Studies, Vol. 51, No. 3 (1992), pp. 629-30.
- (29) Graham Parkes, "The Orientation of the Nietzschean Text," in Graham Parkes, ed., Nietzsche and Asian Thought (Chicago: University of Chicago Press, 1991), p. 13.
- (30) フォーレは彼論論文「The Kyoto School and Reverse Orientalism」の一節において(p. 265 以下)「新京都学派」と梅原猛の「自国論」を批判した。
- (31) 柄谷行人「二つの精神 二つの十九世紀」、『現代思想』第15巻第7号54-66頁。〔翻訳者注：著者は次の英訳を引用した。Karatani Kojin, "One Spirit, Two Nineteenth Centuries," South Atlantic Quarterly, Vol. 87, No. 3 (1988), pp. 615-28, 621; reprinted in Miyoshi and Harootian, Postmodernism and Japan, pp. 259-72.] ハインリッヒの言葉についての対話より「ある日本人とある質問者との間の」についての啓発的な議論は「次の著作の第二章を参照。Reinhard May, Heidegger's Hidden Sources: East-Asian Influences on His Work, trans. Graham Parkes (London: Routledge, 1996).
- (32) 柄谷行「二つの精神 二つの十九世紀」60頁 [Karatani, "One Spirit, Two Nineteenth Centuries," p. 266.] 「近代の超克」の運動についての細心の注意をならせた議論については、大橋良介『日本のなまのヨーロッパ的なの』(東京：新潮社、1992)

- 143-63頁。Mihamoto Ryoen, "The Symposium on 'Overcoming Modernity,'" in *Rude Awakenings*, pp. 197-229 を参照。
- (33) 柄谷行「二つの精神、二つの十九世紀」61頁 [Karatani, "One Spirit, Two Nineteenth Centuries," p. 266-67]。柄谷はここで、『九鬼周造全集』第三巻287-89頁の「日本の性格」における議論について述べている。
- (34) 柄谷行「二つの精神、二つの十九世紀」61頁 [Karatani, "One Spirit, Two Nineteenth Centuries," p. 267]。九鬼「日本の性格」287頁を参照。
- (35) 九鬼「日本の性格」290頁。
- (36) 九鬼「日本の性格」290-91頁。
- (37) 柄谷行「二つの精神、二つの十九世紀」61頁 [Karatani, "One Spirit, Two Nineteenth Centuries," p. 267]。柄谷は「ハイデッガーをどこから引用したのか記していない。調べてみるよ」ハイデッガーの文章は「後に出版された1965年の講義録Einführung in die Metaphysik (Tübingen: Niemeyer, 1953), pp. 37-38 (216のヤコブ・バルデハイデッガーは「自分の1966年の講演 "Die Selbstbehauptung der deutschen Universität" を引用しているのだが)に載っていた。
- (38) 特に英訳には問題がある。柄谷の論文の英訳者は「ハイデッガーの英訳本Ralph Manheim, Introduction to Metaphysics (New Haven: Yale University Press, 1959), pp. 49-50」またはその箇所を仏語で引用している(恐らく柄谷自身が引用したジャック・デリダ, *De l'esprit* (Paris: Editions Galilee, 1987)を参照しなかったようである。その中でも一番ひどい誤訳は「zum Wesen des Seins zu the Being [Wesen] of the individual」と訳した点である。
- (39) 九鬼の思想についての哲学的に啓発的な著作については坂部恵「不在の歌—九鬼周造の世界—」(東京、「ESブリタニカ」1990年)を参照。
- (40) Leslie Pinous, *Authenticating Culture in Imperial Japan: Kuki Shuzo and the Rise of National Aesthetics* (Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 1996)。ピンカスによる九鬼に対する批判は、次の論文において始まった。"In a Labyrinth of Western Desire: Kuki Shuzo and the Discovery of Japanese Being," in Masao Miyoshi and H. D. Harootyan, eds., *Japan in the World* (Durham and London: Duke University Press, 1993), pp. 222-36。私はこの論文を「本論文の中心となった論文 (Philosophy East and West) に掲載」について「詳細に渡り批判している」。ピンカスの著作本についてのより詳しい議論については「Chamoyu Quarterly」86 (1997): 63-70に記載

されている私の書評を参照。

- (41) 坂部恵『不在の歌—九鬼周造の世界—』24頁。Leslie Pincus, *Authenticating Culture in Imperial Japan: Kuki Shuzo and the Rise of National Aesthetics* (Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 1996), p. 31を参照。ペンカスが指摘したのは、単行本として出版される前に「九鬼周造の世界」として雑誌に連載された坂部の著作のことである。
- (42) Leslie Pincus, *Authenticating Culture in Imperial Japan: Kuki Shuzo and the Rise of National Aesthetics*, p. 93。ペンカスは、次の本に言及している。Peter N. Dale, *The Myth of Japanese Uniqueness* (London: Croom Helm, 1986), p. 72。ミールの本は、その大げさで耳につく文体に耐えることが出来るのであれば、興味深い様々な情報を与えてくれる。しかし彼の九鬼についての論述は、明らかに表面的なものである。
- (43) Leslie Pincus, *Authenticating Culture in Imperial Japan: Kuki Shuzo and the Rise of National Aesthetics*, pp. 55, 176。ハイティンガーの *Sein und Zeit* における 'Volk (民族) について言葉が唯一記されているのは、ドイツ語原本の 3004 頁である。
- (44) Leslie Pincus, *Authenticating Culture in Imperial Japan: Kuki Shuzo and the Rise of National Aesthetics*, pp. 213, 220。ペンカスは *「九鬼の「日本的性格」と「時局の感想」* (『九鬼周造全集』第五巻) の二つの論文に言及している。
- (45) 九鬼「日本的性格」290頁。
- (46) この九鬼の論文について、ペンカスが以前に議論したもの(上記(40)を参照)に対する私の批評は、*Philosophy East and West* の "The Putative Fascism of the Kyoto School and the Political Correctness of the Modern Academy" を参照。
- (47) Ian Buruma の *The Wages of Guilt* におけるこの問題についての論述は、それが不穏な問題であることを知らせてくれる。